【特集：高次の「学び」の獲得を目指して】

私は何者なのか

現代社会における自己提示の病理と，「志」ないし「宣言」としてのアイデンティティの可能性

（平成 28 年 8 月 31 日提出，11 月 4 日受理）

What am I ?
For the Identity as one's own Life-Aim or Self-Declaration, overcoming Troublesome Self-Presentation in the Modern Society

奈良学園大学人間教育学部
梶田　叡一
KAJITA Eiichi
Nara-Gakuen University
Faculty of Education for Human Growth

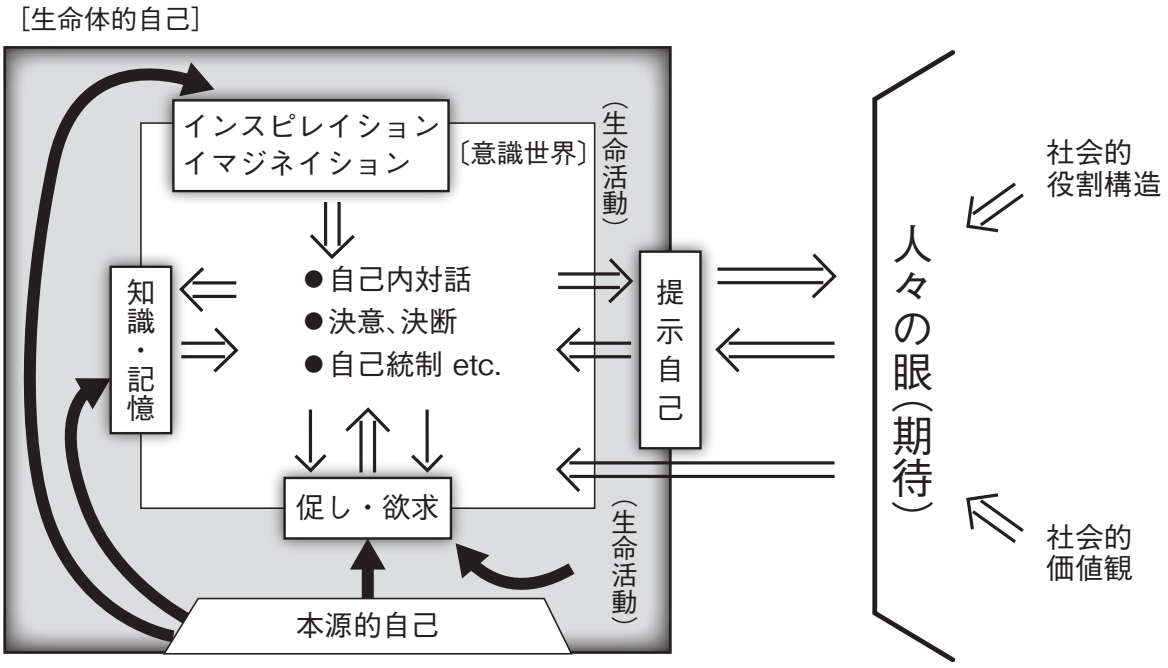
キーワード：社会的アイデンティ，自己アイデンティティ，肉付きの仮面，社会的期待，自己提示，本源的自己，居場所

Abstract：Typical relationships between social-identity and self-identity in modern society are examined. Case 1 is concerning the heroine in a recent popular novel and her identity is ruled totally by the "presented self" based upon the "social expectation". Case 2 is concerning boys and girls who can not go to school and stay in their home. And their identities are characterized as the renunciation of the "presented self" freeing from the "social expectation". Case 3 is named as "identity based on life-aim" or "identity as self-declaration". The episodes of Jesus from the New Testament are presented as the typical example of this type of identity. And it is thought as the most independent kind of identity but at the same time it may lead the person to the dangerous road.

Keywords：social-identity, self-identity, presented self, unconscious fundamental self, identity based on life-aim, identity as self-declaration

人は，自分自身の在り方を改めて確認したり変更したりしなくてはならない「時」に遭遇することがある。学校を卒業して就職したり，転勤や転職で職場や住処が変ったり，昇任等で職場での担当や責任が変化したり，それまでの仕事を辞めて引退したり，といった社会的立場の変化に直面した場合である。また，社会的立場に変化は無くても，それまでの生活に行き詰まったり，大きな心理的転機に直面した場合にも，自分自身の在り方について根本的な再検討を迫られる場合がある。これは「周囲の皆から私を○○であると認めて貰っている」という社会的アイデンティティの再確認なり変更なりに関わる問題であり，また同時に，「私は他ならぬ○○である」といった自己アイデンティティをどうするか，に関わる問題である。

こうした社会的アイデンティティと自己アイデンティティの再確認については，図 1 として掲げた（注 1）ところを参照して頂くと，そこでの主要な問題の所在が見えてくるのではないだろうか。「私は何者なのか」ということの再吟味に際しては，「人々の眼」という形での社会的期待をどのように受け止め，それにどう応えて自分の言動を整えたなら社会的に受け入れて貰えるか，という「提示自己」をめぐっての検討が，何よりもまず必要となるであろう。そしてその「提示自己」との関係で，自分自身の内的な世界の在り方が，



［図 1］　生命体自己・意識世界・社会的自己提示

すなわち自己の深い無意識世界から催されたり突き上げたりして来る促しや欲求を，またインスピレーションやイマジネーションを，意識世界でどう受け止め，どう対処し処理していくか，ということが大きく関係してくることになる。このことは，時々刻々の体験とその意識内での受け止めである経験の蓄積に依って形成された実感・納得・本音の世界を踏まえると同時に，一個の生命体としての諸欲求の充足を求め，さらには自己の将来に向けての志や願望までをはらむ「本源的自己」と，社会で自分自身を「何者」としてイメージして貰い，受け入れて貰うかという「提示自己」との関係を基本的にどう調和させていくか，といった問題となる。

【「提示自己」が圧倒的重みを持ち「肉付きの仮面」として内面世界全体を支配する例――村田沙耶香『コンビニ人間』の場合】

現実の社会との関りの中で自分自身がどのような在り方であったら受け入れて貰えるか（「普通の人」「当然の在り方」として許容されるか）という「提示自己」の整え方の問題は，多くの人にとって極めて重い課題である。例えば，2016 年上半期の第 155 回芥川賞を受賞した村田沙耶香の小説『コンビニ人間』(注2) は、「コンビニ店員」として「提示自己」を整え，それによって社会的に受け入れて貰うことを至上命令として自己に課してきた若い女性の具体的在り方を見事に浮き彫りにする。この場合には，自分自身の内的な欲求やインスピレーションまでを含む意識世界を，四六時中「コンビニ人間」としての「提示自己」に浸透された在り方とする，という形で一応の外的かつ内的な適応を図ろうとしている。これはまさに「肉付きの仮面」の典型例と言ってよい。

村田沙耶香は，小説『コンビニ人間』の中で，例えば次のように叙述する。

「いらっしゃいませ！」

私はさっきと同じトーンで声をはりあげて会釈をし，かごを受け取った。

そのとき，私は，初めて，世界の部品になることができたのだった。私は，今，自分が生れたと思った。世界の正常な部品としての私が，この日，確かに誕生したのだった。―――

今の「私」を形成しているのはほとんど私のそばにいる人たちだ。三割は泉さん，三割は菅原さん，二割は店長，残りは半年前に辞めた佐々木さんや一年前までリーダーだった岡崎くんのような，過去のほかの人たちから吸収したもので構成されている。

特に喋り方に関しては身近な人のものが伝染していて，今は泉さんと菅原さんをミックスさせたものが私の喋り方になっている。―――

「白羽さんの言うとおり，世界は縄文時代なのかもしれないですね。ムラに必要のない人間は迫害され，敬遠される。つまりコンビニと同じ構造なんですね。コンビニに必要のない人間はシフトを減らされ，クビになる」

「コンビニに居続けるには『店員』になるしかないですよね。それは簡単なことです。制服を着てマニュアル通りに振る舞うこと。世界が縄文だというなら，縄文の中でもそうです。普通の人間という皮をかぶって，そのマニュアル通りに振る舞えばムラを追い出されることも，邪魔者扱いされることもない」―――

この小説は，「コンビニ店員」という社会的アイデンティティにしがみつき，自分にとって居心地の良くなったそのアイデンティティを周囲の無理解に抗して守り抜くことを通じて，強固な自己アイデンティティにまで仕立てあげていく，という物語として読むことができる（注3）。なぜ「コンビニ店員」という社会的アイデンティティにしがみつくかというと，自分の内奥にうごめく衝動なり欲求なりを（問題含みの「本源的自己」のあり方を）そのまま外部に表出すれば「普通」でないと周囲の目に映るおそれがあるからである。自分自身の「本源的自己」を覆い隠して適応的に(「普通」と見えるように)生活していくためには，マニュアル通りに細部まで言動が規定され，基本的にその通りに動く同僚の言動に同調して，それと融合させる形で自分自身を振る舞わせていく（自己提示していく）のが一番楽で居心地が良いからである。

こうした「肉付きの仮面」の背景には，次のように叙述される彼女自身の，まさに問題含みの「本源的自己」のあり方がある。例えば幼稚園児の頃，公園で死んだ小鳥を見つけ，他の子どもは「かわいそう」と泣いているのに，「焼き鳥にして食べよう」と言って友達にも母親にもあきれられたとか。小学校に入ったばかりの頃，男子が取っ組み合いのけんかをしている時，何とか止めようと，手近にあったスコップで暴れている男子の頭を殴ったら動かなくなった，ということもあったとか。若い女の先生が教室でヒステリーをおこしてわめきちらし，皆が泣きはじめた時，先生に走り寄ってスカートとパンツを勢いよく下ろしたら，先生は仰天して泣きはじめ，静かになったとか。これは，それぞれの場における暗黙のルールに無知あるいは無頓着，ということを示すものである。「空気が読めない」のであり，現実検証能力に欠陥があるか，物事を受け止める際の感性なり実感なりの世界の構造に他の人と大きく異なる点がある，ということであろう。だからこそ「非常識な」言動が周囲の人達に向けてさらけ出されてしまっているのである。

こうした自分自身の内的世界の特異性と周囲の人間関係におけるその問題性に気付いているからこそ，そうした「本源的自己」を封印(抑圧）し，外部の世界にあるマニュアルに添って自分の言動をコントロールすることに努めてきたわけである。その結果として，外部の世界のマニュアルが徐々に意識世界の隅々にまで浸透し，日常生活のすべてがそのマニュアルに添った形で進行するという在り方になってしまった，というわけである。自分自身の素顔を特定の仮面をかぶって覆い隠し続けていたら，いつのまにか，その仮面がその人の顔の後ろ側にある意識世界までをも支配してしまうようになった，という「肉付きの仮面」の典型的事例と言ってよい。

【「提示自己」の不全は何を生むか――不登校や引き籠りになる子どもの場合】

「コンビニ人間」のような在り方は，現代人にとって必ずしも珍しいものではない。しかし，そうした在り方もまた取れないで苦しんでいる人もあることを忘れてはならない。

社会的に「普通」なり「当然」なりとして許容されるような「提示自己」の整え方がなかなかうまくいかない，といった人である。こうした場合，結局は社会的にうまくやっていけないことになるが，その結果として犯罪などの攻撃的不適応に陥ったり，不登校や引きこもりなど内閉的不適応に陥ってしまうことになりがちである。

そうした社会的不適応の一例として不登校の子どものことを考えてみることにしよう。通常の学校生活を送れない事情を抱えた生徒が多く通う大阪府立桃谷高校定時制課程にかつて勤務し，そこでの教育経験を綴った下橋邦彦は，その『ハロハロ通信』の「まえがき」で，不登校の成立事情について次のように述べる（注4）。

若い生徒の中には，小・中学校で不登校になった人が実に多い。集団にとけこめず，周囲にあわせられず，いじめをうけ……といったさまざまな苦しみの体験の持ち主。

自分の内面の「声」に立ち止まりたくても，周囲の大人から「社会化」（社会への適応）の必要性を説かれ，周囲にあわせることを迫られる。それをうまく受

けとめられる人はいい。そうでない場合，学校は「苦しい場所」になる。「閉じられた場所」から身を引く，それが不登校となる。……

自分自身の内面世界の在り方が，特に「本源的自己」の在り方が，「社会的期待」になかなか応えていけない，という子どもが，不登校や引き籠りまで行かなくても，何の拘束もない自由な場に新たな居場所を見つけ，周囲からの「普通」や「当然」に向けての期待から解放されようとすることがある。通信制高校もそうした居場所の一つになっていると下橋邦彦は言うのであるが，周囲からの「普通」や「当然」に向けての期待といった圧力のない「自由な」状況を実現できたとなると，具体的にどう自分の身を処していくか，という次のステップの問題が生じる。下橋邦彦は，先の記述に続けて次のように述べる。

はじめ，これらの生徒さんは，決まった「生徒心得・規則」もない学校に，いままでにない「自由」を感じる。しかし，学校生活が進むにつれ，だれもきつく「こうせよ」とは言わない「自由さ」にとまどう。通信制の三本柱である，スクーリング・レポート・テストといったものをクリアーするには，よほどの「自己管理」をしないと単位修得に至らないことに気付きはじめる。一にも二にも「自分にきびしく」しないとダメだということがわかってくる。……

社会に生きている以上，形は変わっても，社会からの期待に合うよう自分自身をコントロールする，という責務を何とか果たしていかなくてはならない。外から与えられた制服やマニュアルを拒否するとするなら，自分自身で新たに自分なりの服装と行動原則を作り出し，それを自分なりの自己提示の仕方として周囲に認めさせていくしかない。これがしんどいということになると，結局は自己提示の在り方を考えること自体から逃避し，引き籠りになるしか道がないということになる。当然のことながら，引き籠りになっても生物的には生きていかなくてはならないのであるから，親など周囲の誰かが社会の一員として機能することによって引き籠りの人の生物的な生存を支えていくしかない。この意味で引き籠りは，それ自体として自立した生存様式にはなり得ないのである。

【「社会的期待」に背反する「提示自己」=「志」ないし「宣言」としてのアイデンティティの打出し――新約聖書に見るイエスの場合】

では，自分自身の内面世界に対して素直でありながら，しかも社会的に「それでよし」と認められていく道は，どのようにして実現していけるのであろうか。直接的な方法は，何よりも先ず自己アイデンティティを確固たるものにし，その外的表現としての社会的アイデンティティの承認を社会的に求める，といったものではないだろうか。内面世界の基盤となる「本源的自己」に深く根差すことに努め，それをできるだけ十分に外部に対して表現しつつ，なおかつそうした在り方が社会的に容認され承認されることを求める，ということである。

自分の内面世界の在り方が「社会的期待」にそぐわない場合，きわめてラジカルな形でそれを突破する道がまさにこうした在り方である。それは自分自身の「本源的自己」に根ざす強力な「主張」を内面に養っていき，その線に添った「自己提示」をしていって最終的には周囲の人たちにそれを認めさせ，「社会的期待」を自分自身の「主張」に合うように変革していくことである。こうした「宣言」としての社会的アイデンティティを追求する道に踏み出すならば，強固な「社会的期待」の壁と衝突を繰り返し，犯罪者なり異常者なりとして社会から排除される危険性も少なくない。しかし，その「主張」なり「宣言」なりを受け入れ歓迎してくれる人が，例え少数であっても出てくるならば，そのアイデンティティで生きていくことは必ずしも不可能ではない。その徒党の中で大事にされ，守られて生きていくことができるからである。

こうした道に踏み出すならば周囲との間に多大な軋轢を経験することになるが，これは周囲の人達が持ってきたその人についての期待やイメージ（社会的アイデンティティ）と，新たにその人によって打ち出され（「自己提示」され）た在り方とが大きく食い違う，といったことが生じるからである。

例えば，新約聖書に描かれたイエスの次のような２つのエピソードは，人が自分自身の「志」を持ち，周囲からの「社会的期待」とは無関係な形で「自己提示」し，新たな社会的一歩を踏み出そうとする情景を如実に映し出している。特に，その「志」と，それに基づく「宣言」によって新たな自分に生きていこうとする際に生じる周囲との軋轢の模様が，如実に 描き出されていると言ってよい。

イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが，弟子たちも従った。安息日になったので，イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて，驚いて言った。「この人は，このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と，その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は大工ではないか。マリアの息子でヤコブ，ヨセフ，ユダ，シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは，ここで我々と一緒に住んでいるではないか」。このように，人々はイエスにつまずいた。イエスは，「預言者が敬われないのは，自分の故郷，親戚や家族の間だけである」と言われた。そこでは，ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで，そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。[マルコ福音書６.１～5]。

ここでのイエスの「志」＝自己アイデンティティは「預言者」であるが，故郷の人たちはイエスをそうした特別な存在としてみようとしない。イエスは成人してからずっと大工として身を立ててきたわけである。そして後年，洗礼者ヨハネの下に身を投じて数年間の宗教的修養をし，権力者によるヨハネの投獄殺害を機会に自立し，生涯最後の数年だけ，人々に向けて「神の国の到来」等を説いて廻り，病人を癒したりする奇跡を行うなどという「公生活」を送ったわけである。昔の自分を知っている人たちの間で新しい自分を押し出していくということが如何に困難なことであったか，よく伺えるエピソードである。

イエスの生涯の最終ステージに近いところでのエピソードを，もう一つ，見ておくことにしたい。

イエスは，弟子たちと，フィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中弟子たちに，「人々は，わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに，『エリヤだ』と言う人も，『預言者の一人だ』と言う人もいます。」そこでイエスがお尋ねになった。「それでは，あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたはメシアです。」するとイエスは，御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒（イマシ）められた。[マルコ福音書 8.27～30]。

イエスはこの頃には，内心で「自分は何者であるのか」という自省を深め，「自分自身 は単なる預言者でなくメシアである」との確信を抱いていたのであろうが，それは当然の ことながら，人々が彼に対して持ってきた従来の基本イメージや「社会的期待」＝社会的アイデンティティとは掛け離れたものであった。イエスを尊敬する人たちですら多くは「洗礼者ヨハネだ」とか「預言者だ」と言っていたのである。そこでもっとも信頼できる側近である弟子ペトロに，「お前たちはどう思っているのか」と尋ねたら，自分の内心にある自己イメージと同一のイメージを自分たちは持っていると答えてくれた，というエピソードがここで語られている。「メシア」としての自己アイデンティティ＝自覚を持って生きていこうとする自分に対して，弟子たちは（少なくともこの段階では）完全に理解してくれてたということである。イエスが捕縛され，死刑に処せられようとする段階では，ペトロも「こういう人は知らない」と否認し，他の弟子たちと共に四散してしまうのであるが‥‥。

いずれにせよ，人は何時までも，同一の自己アイデンティティを保持したまま生きていくことはできない。人生の節目節目で，新しい自己アイデンティティを確立し直さなくてはならなくなる。そうした自己アイデンティティ再確立の折に，望ましくは，自分自身の「本源的自己」について自省を深め，そこから出てくるものを上手に生かす（昇華させる）形で（注５）自己意識の世界の全体を方向づけし直し，新たな「志」の形に纏めあげていきたいものである。そして，そうした「志」を生かし実現していく方向での「宣言」を機会あるごとに周囲に対して行い，それに基づく「自己提示」を重ねていくことによって周囲からの「社会的期待」そのものを変え，新たな社会的アイデンティティを創りあげていく，といった 方向に歩んでいきたいものである。

もちろん，これは危険の多い茨の道である。だからこそ，「志としてのアイデンティティ」を周囲に提示＝宣言していくに際しては，周囲に対する慎重な配慮と自己提示の具体 的なあり方についての柔軟な工夫とが求められざるを得ないであろう。しかし，これが如何に困難な道であろうと，人が真に主体的・能動的であろうとするなら，こうした道をこそ歩むべく自分自身を律していくことが必要となるのではないだろうか。

【注】

（注１）梶田叡一『人間教育のために』金子書房，2016，p100，図１.（本図は，梶田叡一「主体的人間の内面構造――有能な『駒』でなく賢明な『指し手』であるために」人間教育学研究，３，2016，１～6．の図１を少し修正したもの）。

（注２）『文藝春秋』2016 年９月号，406 ～ 482.

（注３）『文藝春秋』2016 年９月号，400 ～ 405。私はこの小説をこのように読み取った。村田沙耶香自身が芥川賞作家の宮原昭夫から「小説家は楽譜を書いていて，読者はその楽譜 を演奏してくれる演奏家だ」ということを教えられたとのことであり，こうした筆者の読 解も許されるのではないだろうか。ちなみに筆者は京都大学文学部の学生だった頃，桑原武夫教授の 1962 年度フランス文学演習に参加したが，その折にモーリス・ブランショの『文学空間』に関連させて「テキストの空間」「書き手の空間」「読み手の空間」の相対的自立性を桑原教授が力説したことを思い起こす。村田沙耶香の楽譜と演奏との対比は，桑原の言うテキストと読み手の文学空間の関係として捉えることができるであろう。

（注４）下橋邦彦『ハロハロ通信――三世代が集う学校から』東方出版，2002 年。

（注５）「本源的自己」から我々の意識世界にもたらされるものには，善良なものも中立的なものも悪魔的なものもあり，また建設的なものも破壊的なものもある。これを我々の意識の世界に汲み上げて自分自身の言動の方向づけに用いるわけであるが，その際にスクリーニング（選択採用）が不可欠となる。悪魔的なもの，破壊的なものを振るい捨てていかねばならないのである。そうした吟味振り分けを経て，我々の意識世界の中に，一つの内的強靭さを持ち，また社会的に受け入れ可能な方向づけが形成されていかねば，「志」とはなり得ないであろうし，また周囲に対してそれを「宣言」していくことも，さらにはその方向で「社会的期待」を変革していくこともできないであろう。

［参考文献］

梶田叡一『内面性の心理学』大日本図書，1991 年。

梶田叡一『人間教育のために』金子書房，2016 年。

梶田叡一・溝上慎一（編）『自己の心理学を学ぶ人のために』世界思想社，2012 年。

梶田叡一・中間玲子・佐藤徳（編）『現代社会の中の自己・アイデンティティ』金子書房，2016 年。